2021年度岐阜県演劇大会　三日目　1校目　　≪講評文≫

関有知高校 「逢うは別れの始め」

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽

関有知高校は、「昨日の私にさよなら賞」です、

辛い過去に、向き合わざるを得なくなった主人公。でも向き合うことで、過去の自分を認め乗り越えて未来に向かってゆく主人公の姿が素敵だったからです。

演劇部の〈梨央〉は、中学生のときバレー部で、一人だけ初心者でうまくなかったためいろいろな辛い目に遭う。その辛い目に遭わせた中の一人、〈結菜〉が高校のバレー部で身体を壊して退部し、演劇部に入ってくる、初心者として。二人は周囲に知られることのないまま、次の公演の主役を練習している。初心者の〈結菜〉に対するダメ出しは、ついついきつくなってしまう。そして、ついに二人は中学校のときのことを話し合う。〈結菜〉の謝罪に対して〈梨央〉は「もっと早く聞きたかった。」と言いながらも、「あなたが私にしたことは決して忘れない、忘れないけど、私はそれには振り回されたくない。だって、悔やみ続けるのって、不幸だから。」と、仕返しをしないことで、悪意の連鎖を解消し、過去のトラウマからも解放されていく。

教室で演劇部の練習場所である舞台がきちんと作られていて、日常的な雰囲気（演劇部にとって）が違和感なく演じられていました。そんな日常的な雰囲気から、徐々にギクシャクした人間関係（かつての〔いじめ〕の加害者が共演者になっている。）が明らかになっていきますが、その微妙な関係が丹念に演じられていました。「演技がうまい。」「間の取り方がうまく、気まずい雰囲気などがよく伝わってきた。」「トイレに行くなどの行動も、しんどくなったことの表現として自然であった。」「地区大会よりパワーアップしている」というように、演技の自然さを評価する意見が多く聞かれました。

〔いじめ〕というようなことを扱うと、落ち込んだり怒ったり、激しい感情の応酬になったり、逆に安易にわかり合って感動的な場面に走ったり、という〔劇的なもの〕になりがちだけれど、あくまで自然な感情、日常的な表現に徹したところがいいと思いました。それはやはり〔いじめ〕という事件を描こうというのでなく、それを通して成長していく主人公の姿を自分たちに重ね合わせて作っていったからだと思います。

関有知高校の皆さん、おつかれさまでした。

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽